



Фестиваль российской культуры в Японии-2022

ロシア文化フェスティバル 2022 IN JAPAN

ロシアの新星と日本演奏家の 合同コンサート (オープニングコンサート)

Камерный концерт, посвященный открытию Фестиваля российской культуры в Японии-2022

2016年第3回
全ロシア音楽コンクール優勝



ヴァイオリン

ラヴィリ・イスリャモフ

2013年第1回
オーボエオープンコンクール優勝



オーボエ

アレクセイ・サヴィンコフ

2013
ワイトル国際ピアノコンクール優勝



ピアノ

アンドレイ・チェルコフ

エドヴァルト・グリーグ
国際ピアノコンクール優勝



ピアノ

松田華音

©Ayako Yamamoto

2007年第13回
チャイコフスキー国際コンクール優勝



ヴァイオリン

神尾真由子

2022年
8月29日 紀尾井ホール

17:30開場 18:30開演
全席指定5000円

感動のロシア音楽
芸術のひとときを

コロナウイルスとたたかひながら、日露文化交流の火を消すことなく、ロシア文化フェスティバルは17年目を迎えました。注目されるロシア新星ソリストを迎え、日露合同コンサートを2022年のオープニングとして開催します。冒頭、フェスティバルのテーマソングを中村初恵が独唱します。

中村初恵



演奏曲目(予定)

A:スクリャーピン/ワルツop.38 R:シchedリン/パッサオスティナート
S:ラフマニノフ/楽興の時op.16-6 M:バラキレフ/東洋的幻想曲「イスラメイ」
S:ラフマニノフ/ヴォカリーズ
G:ロッシーニ/M:カステルヌオーヴォ=テデスコ編曲
/歌劇「セビリアの理髪師」より「フィガロのカヴァチーナ」の主題のパラフレーズ
細川俊夫/ヴァーティカル・タイム・スタディⅢ

主催/ロシア連邦外務省、ロシア連邦文化省、ロシア文化フェスティバル組織委員会
後援/駐日ロシア連邦大使館、ロシア連邦文化協力庁、日露協会、INARTEX、ロシアン・アーツ
協力/サンクトペテルブルグ音楽会館、KAJIMOTO、ジャパンアーツ
問合せ/ロシアン・アーツ ☎03-5919-1051(平日11:00-17:00)
e-mail: russian-arts@e-mail.jp



曲目解説

石田一志 (音楽評論家)

スクリャーピン ワルツop.38

本年生誕150年を迎えるアレクサンドル・ニコラエヴィチ・スクリャーピン (1872~1915) は、音楽史の上では神智学への傾倒から神秘主義思想の音楽的表現として神秘和音を駆使した作品50番台以降の無調へのあゆみが重視されている。しかし、ショパンの影響が色濃い初期の作品からすでにその音楽は、独特の哀感漂う繊細な味わいを示している。作品1の短調のワルツ (1885) から8年後のこの作品38の変イ長調のワルツ (1903) は、その優雅さにおいてショパンのワルツを連想させるとしても、和声語法は完全に独自のものである。



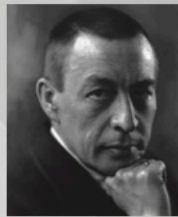
シCHEDリン バツ・オスティナート

ロディオ・シCHEDリン (1932~) は、旧ソ連・ロシアを代表する作曲家・ピアニストとして、ほとんど例外的に早くから国際的な評価を得ていた。音楽家として豊かな才能のみならず、行政上の手腕にも秀でて62年からソ連邦作曲家同盟の書記、73年からは議長に就任し、その間、幾度もロシア連邦最高会議の議員に選出された経歴をもっている。また妻のバレリーナ、マイヤ・プリセツカヤ (1925~2015) とのコラボレーションによるバレエ作品「せむしの仔馬」(55)、「カルメン」(67)、「アンナ・カレーリナ」(71)、「かもめ」(79)、「子犬を連れて来た婦人」(85)なども話題となった。「バツ・オスティナート」は、1961年に作曲されモスクワ音楽院でのピアノの恩師ヤコフ・フリエールに献呈された「2つのポリフォニックな小品」の第2曲。ロンド形式の構成で、主部は左手のオクターブによるジャズ風のランニング・ベースに乗った推進力あふれる即興的な楽想。そこに無機質なシークエンスによる2つのエピソードが加わる。最近、そのワイルドな活力に人気が高まっている。



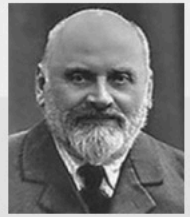
ラフマニノフ 楽興の時op.16-6

セルゲイ・ラフマニノフ (1873~1943) の1906年の作品。ラフマニノフには1897年の第1交響曲と1901年のピアノ協奏曲第2番との間に深刻な神経症に悩まされたスランプの時期があって、これが第1期と第2期との境となる。つまりこの境の直前の23歳の年に書かれた「楽興の時」は、第1期の最後を飾る作品にあたる。小品集であるが、すでに卓抜なピアノ書法が随所に盛られている。この第6番は八長調、マエストロ。激動的な動きをもち、波乱にとんだエネルギーあふれる表情がある。



M・バラキレフ 「東洋的幻想曲「イスラメイ」」

ロシア国民楽派のいわゆる「五人組」のリーダーであったミリー・アレクセイエヴィチ・バラキレフ (1837~1910) の1869年の作品。リスト門下の大ピアニストで指揮者のハンス・フォン・ビュロー (1830~94) が「あらゆるピアノ曲の中で一番難しい」といったと伝えられている。またモーリス・ラヴェル (1875~1937) が、その技巧的なピアノ曲「夜のギヤスパール」(1908) を「イスラメイ」以上の難曲を目指して作曲した、という話も有名だ。コーカサス山脈の北側のカフカス地方に伝わる民俗舞曲イスラメイの旋律に基づく近東風のエキゾティシズムを湛えている3部形式の曲で、第1部、第3部でとくに華麗な技巧が要求される。中間部では新しい旋律がドローン上に現れる。



ラフマニノフ 「ヴォカリーズ」

ピアノと結び付けて評価されることが多かったラフマニノフだが、ソ連邦崩壊の頃から宗教音楽、歌劇、交響曲、室内楽、声楽曲に至る広いジャンルに残された作品が等しく親しまれ、愛されるようになった。「ヴォカリーズ」はもともとは「14の歌曲」作品34 (1912) の14曲目の歌詞のない歌曲。例外的に早くからチェロをはじめとする弦楽器や管楽器の演奏家たちが好んで取り上げてきた名旋律である。

G・ロッシニ M・カステルヌオーヴォ・テデスコ編曲 「歌劇『セビリアの理髪師』より 『フィガロのカヴァティーナ』の 主題のパラフレーズ」

「セビリアの理髪師」(1816) は、コメディ・フランセーズで脚光を浴びた、年若い養女に惚れ込んだ養父が「若さと恋」の才覚に敗れるというポーマルシェ (1732~99) の同名の喜劇 (1775) を原作とするオペラ・ブッフア史上の最高位の名作。文字通り、ジョアッキノ・ロッシニ (1792~1868) の名を不朽のものとした。これはオペラ第1幕で理髪師のフィガロが登場する場面の歌われるアリア。「私は町の何でも屋」とバリトンが早口でまくし立てるこの歌は人気高く、単独で演奏される機会も多い。例えば器楽では、98年のチャイコフスキーコンクールの覇者で超絶技巧で知られるピニストのデニス・マツーフがレパートリーにしている。



細川俊夫 「ヴァーティカル・タイム・スタディⅢ」

細川俊夫 (1955-) は1980年代に多くの名だたる音楽賞を受賞して国際的な注目を浴びるようになったが、その独特の厳しい緊張感を湛えた作風を確立したのは90年代のことであった。いわばその方向を決めたのがこの「ヴァーティカル・タイム・スタディ」の連作である。この第3番は、94年の武生国際音楽祭で漆原朝子、ペリー・スナイダーによって初演された。



巨匠S・ロルドーギンが特別派遣する
ロシアの新星ソリスト3名と、
若き天才ピアニスト・松田華音、
チャイコフスキー国際コンクール優勝の
神尾真由子が協演する
日露合同コンサート!!

*新型コロナウイルス感染状況等により演目・出演者が変更される場合があります。ご了承ください。